

1 アリス・フェル

一貧しき孤児一

郵便馬車の少年は全速力で馬を走らせていた
暗雲が月を隠して 今にも大降りになりそうな気配だ
先へ先へと急いでいると
びっくりするような物音がわたしの耳を打った

まるで風が四方から吹き寄せるように 5
音はどんどん耳元に迫ってくる
馬車の後を追うように
どこまでも付いてくる

ついにわたしは 御者の少年に大声を張り上げた
その声に 彼は馬を止めた 10
しかし 何の泣き声も叫び声も聞こえない
いや それらしき物音は何も聞こえない

少年はふたたび鞭を当て
馬たちは 雨の中を全速力で駆け出した
しかしすぐにまた 突風に乗って泣き声が聞こえ 15
わたしは また馬を止めるように命じた

^{ただ}直ちに道に降り立ったわたしは ^{つぶや}呟いた
「この哀れな泣き声は一体どこから」
そして 気付いたのだ
女の子が独り ^{ひと}馬車の後ろに座っているのではないか 20

「あたしのマントが」とだけ その子は言って
大声で激しく泣いた
無邪気な心臓が今にも破裂しそうである
それから その子は座っていた場所から飛び降りた

「どうしたのかい」 女の子は泣きながら「これ見て」 25
何かが車輪に巻きついているのが見える
庭の案山子にぶら下がっている
雨風に ^{さら}晒されたぼろ切れのようなものだった

車輪のハブとスポークの間に挟まって
簡単には取れなかったが 30

力を合わせて 何とか外した^{はず}
いや 見るもみすばらしいぼろ切れだ

「お嬢さん どちらへ行くんだね
今夜のような寂しい夜道を」
「ダラムよ」 女の子はぶっきらぼうに答えた 35
「だったら さあ 中にお入り」

皆んながホッとしたのも気づかぬ^げ気に
哀れな女の子は座った途端に
啜り泣き始めたが それはまるで
悲しみが永遠に終わらないとでもいう風だった 40

「お嬢さんはダラムに住んでいるのかな」
女の子は急に泣き止んで
「あたしの名前はアリス・フェルよ
お父さんもお母さんもないの

あたしはダラムの者よ」 45
言った途端に胸がいっぱいになり
女の子は また悲しくなって
ぼろぼろになったマントのことで泣くのであった

馬車は走り続け われわれの旅も終わりに近づいた
側に座った女の子は^{そば} 50
まるで無二の友を無くしたように
どんなに慰めても 泣き止まなかった

停車場の旅籠^{ていしゃば}に馬車は急いだ^{はたご}
アリスが悲しむ事情^{わけ}を伝えて
わたしは主に金^{あるじ}を渡し 55
ぼろぼろのマントの代わりを買ってやれと頼んだ

「グレーのダッフルコートを
最高に暖かいものを買ってやってくれ」
幼い孤児アリス・フェルは
翌日は得意^{とくいげ}気に 満面の笑みだった 60

(山中光義訳)